

[26]

氏名	上野 舞斗 ^{うえの まいと}
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第 39 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	Effects of Instruction with/without Explicit Information on Japanese EFL Students Learning English Pronunciation: A Comparison of the Intuitive-Imitative, Analytic-Linguistic, and L1-Pivotal Approaches
論文審査委員	主査教授 山根 繁 副査教授 菊地 敦子 副査教授 新谷 奈津子 専門審査委員 教授 石川 圭一 (関西学院大学)

論文内容の要旨

上野舞斗氏の博士学位請求論文 *Effects of Instruction with/without Explicit Information on Japanese EFL Students Learning English Pronunciation: A Comparison of the Intuitive-Imitative, Analytic-Linguistic, and L1-Pivotal Approaches* (発音指導における明示的情報の有無が日本人英語学習者の発音学習に与える効果：直感・模倣アプローチ，分析・言語アプローチ，母語援用アプローチの比較から) は，3つの主たる実証研究を行い，その結果をまとめ，考察したものである。以下の構成により全 8 章から構成されている。

- 第 1 章 Introduction (序章)
- 第 2 章 Literature Review (先行研究)
- 第 3 章 Methodology (方法論)
- 第 4 章 Study 1: Effects of the Instruction of Segmentals /r, l/
(研究 1: 分節音 /r, l/ の指導における効果)
- 第 5 章 Study 2: Effects of the Word Stress Instruction
(研究 2: 語強勢指導における効果)
- 第 6 章 Study 3: Effects of the Rhythm Instruction

(研究3: リズム指導における効果)

第7章 Overall Discussion (全体的議論)

第8章 Conclusion (結論)

References (引用文献 [204編])

Appendices (A-E) (付録 [5点])

本論文は、近似カナ表記を用いた発音指導の有効性を、発音指導の明示性の観点から、分節素、語アクセント、リズムの3つの側面を検証した研究である。英語発音指導の分野では、従来二つの方法、すなわち直感・模倣アプローチ (Intuitive-Imitative Approach: IIA) と言語・分析アプローチ (Analytic-Linguistic Approach: ALA) が伝統的に用いられてきたが、それらの問題点も指摘されている。上野氏は、上記2つの指導法に加え、学習者の母語を外国語音声学習に援用する方法、すなわち母語援用アプローチ (L1-Pivotal Approach: L1A) の活用を提唱している。この3つのアプローチ (IIA, ALA, L1A) は、発音指導の明示性の点で異なっている。すなわち、IIAは明示的情報を含まないアプローチで、ALAは1種類の明示的情報を含むアプローチ、L1Aは2種類の明示的情報を含むアプローチである。

まず、第1章では、発音指導の重要性、発音指導の目標、明示的発音指導と発音指導の伝統的なアプローチについて概観し、本研究に至った経緯、研究背景を述べている。その上で、本研究の目的、さらに研究課題を提示している。本研究の目的は、発音指導の明示性の異なる上記3つのアプローチが外国語としての英語 (English as a Foreign Language, EFL) を学ぶ日本人学習者の発音学習に与える効果を明らかにすることであり、ここから3つの主たる研究課題が導かれた。具体的には (1) 3つのアプローチにおける明示性の違いが日本人 EFL 学習者の /r, l/ における明瞭性の伸長にどのような影響をもたらすか、(2) 3つのアプローチにおける明示性の違いが日本人 EFL 学習者の語強勢における明瞭性の伸長にどのような影響をもたらすか、(3) 3つのアプローチにおける明示性の違いが日本人 EFL 学習者のリズムの習得にどのような影響をもたらすか、という3つの研究課題である。

第2章では、まず、発音における明示的指導や言語知識について定義を確認している。その結果、明示的・暗示的指導という用語が、使用されるアプローチや技術の明示性の違いだけでなく、発音指導の有無という意味で使われることがあることを明らかにした。そこで、本論文では、明示的・暗示的指導を明示的な情報 (音韻や母語関連情報) の有無による指導と定義している。また、発音指導の明示性の異なる3つのアプローチ (IIA, ALA, L1A) とその指導技術について概観している。さらに、認知負荷理論に基づき、暗示的指導や、2種類の明示的情報を提示する指導は、認知負荷をかけ、学習者のパフォーマンスに負の影響を与える可能性があることを論じている。章の最後に研究課題を再訪し、ここまでの議論を踏まえながら、研究課題に対する仮説を立てている。

第3章では、続く実証研究の方法論について述べている。本論文に含まれる研究は、明示性の異なる3つのアプローチ (IIA, ALA, L1A) を比較する比較研究であるため、まず、

比較研究に求められる条件について確認している。続いて各研究のデザインについて概説している。各研究では、事前テストを受けた参加者が3つの処置群（IIA, ALA, L1A）に分けられ20分間の処遇を受ける。また、発音指導を受けずテストのみを受ける1つの対照群も設定される。参加者は、処遇の後、認知負荷に関する質問紙への回答を行い、事後テストを受ける。こうして得られた事前・事後テストの音声データは、評価者による印象分析、あるいは音響分析にかけている。研究デザインについて概観した後は、個々の研究の参加者、ターゲット項目と事前・事後テスト、処遇、認知負荷に関する質問紙、印象評価・音響分析の方法、統計分析の方法について述べられている。

第4章（Study 1）では、明示性の異なる上記3つのアプローチが、どれほど日本人 EFL 学習者の分節音 /r, l/ の習得に効果的であるかについて調査し、その結果を報告している。/r/ と /l/ の発音の指導に際し、IIA (mimicry) 群、ALA (IPA) 群、L1A (kana) 群の3群に大学生 51 名を分け、それぞれの発音習得上の効果を検査した。学習者の事前・事後の発音を3名の評価者が評価し、これを分析した結果、/r/ の指導については、対照群で事前・事後の伸長が確認されなかったのに対し、3つの処置群では発音の明瞭性が伸長しことが確認された。しかし、処置群間での有意差は確認されなかった。/l/ については、L1A のみで群内（事前・事後間）における伸長が確認され、さらに群間については、L1A と IIA の間、および、L1A と対照群の間に有意差が確認された。すなわち、L1A が効果的に /l/ の明瞭性を伸長させたことを明らかにしている。また、質問紙を分析した結果、L1A の参加者の認知負荷が有意に低くなったことが明らかとなった。加えて、認知負荷と明瞭性に基づいた参加者の発音パフォーマンスに基づいて学習の効率性を算出し、L1A が最も効率のよい学習方法であることを報告している。

第5章（Study 2）では、上記の結果を踏まえ、明示性の異なる3つのアプローチが、どれほど日本人 EFL 学習者の語強勢習得に効果的であるかについて調査し、その結果を報告している。群間での比較では、ALA と対照群の間、および、L1A と対照群の間に有意差が確認され、ALA と L1A で明瞭性が伸長したことを明らかにしている。また、質問紙を分析した結果、認知負荷は処置群間の有意差が確認できなかったが、認知負荷と発音パフォーマンスに基づく学習の効率性は L1A が最も効率のよい学習方法であることを示している。

さらに、第6章（Study 3）では明示性の異なる3つのアプローチが、どれほど日本人 EFL 学習者のリズム習得に効果的であるかについて実験音声学の手法を用いて調査し、その結果を報告している。群間の比較では、IIA と対照群の間、および、L1A と対照群の間に有意差が確認され、IIA と L1A がリズムの等時性をより高めたことが明らかとなった。認知負荷、および学習効率性については、処置群間の有意差は確認できなかったとしている。

第7章では、研究課題に照らして、3つの研究の結果を検討している。本研究から（1）明示的・暗示的指導の効果は対象となる音声特徴によって変わるものの、（2）2つの明示的情報を含む L1A は、対象とした分節音 /r, l/、語強勢、リズムすべてにおいて参加者の発音パフォーマンスを有意に向上させたことが明らかとなった。

第8章では、博士論文の最終章として、本論文で報告された研究結果の要約、示唆、そして限界と今後の課題について記述している。理論的な示唆としては、明示的な指導が発音習得に肯定的な影響をもたらすものの、学習者にとって理解や活用が困難な情報は機能しないこと、そして、明示的・暗示的指導の効果は、学習が比較的容易な項目においては差が現れにくく、学習が比較的困難な項目においては差が現れやすいことを示唆している。教育的な示唆としては、音声学的な情報のみでなく母語に関連した情報も提示する明示的発音指導の重要性、また対象とする音声特徴に応じてアプローチを柔軟に変えることの重要性を挙げている。さらに、今後の課題として、(a) 中長期の実験デザイン、(b) 宣言的知識の測定、(c) 多様な音声特徴の調査、(d) 測定具の信頼性の向上、(e) IPA への学習者の親密度の調査、(f) サンプルサイズを増やして多様な学習者を対象とした調査、そして (g) 擬似実験室的環境での調査の必要性を指摘し、本論文を締め括っている。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：山根 繁，菊地 敦子，八島 智子）は、上野舞斗氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうか確認した。その結果、同氏は、1）必要単位（10単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で 2）論文4編（査読あり全国学会紀要掲載論文1編を含む）、3）口頭発表4回（うち国際大会2回を含む）を有し、4）博士論文聴聞会（2022年11月26日）を終了しており、論文提出のすべての要件を満たしていることが確認できたため、研究科委員会（2022年12月14日開催）に報告し、同氏からの論文提出を承認する決議を得た。これを受けて2023年9月29日に上野氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（2023年10月11日開催）において承認された論文審査委員会（主査：山根 繁，副査：菊地 敦子，副査：新谷 奈津子；学外委員：石川圭一 関西学院大学教授）での審査に入った。また、同時に所定の閲覧期間と手続きをもって、研究科構成専任教員への論文開示も行った。

提出された英文論文（193頁）は、本報告書「1 論文内容の要旨」でも述べたように、過去の関連文献の検討を徹底して行っており、References に記された参照論文は204編にものぼる。これらの大量の文献を精査し、近似カナ表記を用いた発音指導の有効性を、発音指導の明示性の観点から研究課題を明らかにして実証研究に着手したことは、手堅い研究の手続きとして評価に値する。上野舞斗氏が、本論で近似カナ表記を用いた発音指導の効果を実証し、発音面と認知負荷の側面から、その有効性を検証したことは極めて意義深いものと言える。特に、発音指導に際してカナ表記を使用することについて懐疑的な意見を持つ音声学者や発音指導者が少なからず存在する中、今回その有効性が実証された点において研究の価値は非常に高い。

さらに次の4点からも、本学位請求論文は、優れているものと判断することができる。

1) 近似カナ表記を用いた明示的な発音指導が英語発音力向上に効果的であることを統計的な手法を用いて実証し、この分野に新しい知見をもたらしたこと、2) 明示性の異なる3つのアプローチが、どれほど日本人 EFL 学習者のリズム習得に効果的であるかについて実験音声学の手法を用いて調査し、実証性を一貫して追及していること、3) 研究の応用性が顕著であり、音声学的な情報のみでなく母語に関連した情報も提示する明示的な発音指導の重要性の提案という具体的な教育的示唆へとつながっていること、さらに4) 上記の成果が、国際学会でも複数回発表され、大学英語教育学会の紀要 *JACET Journal*, 64 に掲載されるなど、その独創性や有用性が評価されていること。

上記を受けて、上野舞斗氏の学位請求論文が、研究の方法や内容、倫理的配慮、記述の体裁や論理などすべてにおいて、本研究科の博士号に値する水準に達していることを、審査委員会一同が認めた。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。